

BUMP OF CHICKEN

変化する世界で進化を続ける —
みずみずしい衝動を胸に歩んだ30年の軌跡と未来

2026年にBUMP OF CHICKENは結成30周年を迎えた。しかし、30年という途方もない時間を前にすると、祝福する気持ちと同じくらい大きな驚きを覚える。それほどの歳月を経ても、彼らと出会った日の歓びへいつでも立ち返ることができるからだ。

同じ幼稚園に通い、中学時代に親交を深めた藤原基央 (Vo&Gt)、増川弘明 (Gt)、直井由文 (Ba)、升秀夫 (Dr) の4人。升から「バンドを組もう、俺と一緒に日本のロックを変えようぜ」と誘われたことを機に、

藤原が増川・直井と合流。10代アーティストの登竜門『TEENS' MUSIC FESTIVAL』に出場した初ライブの日＝1996年2月11日を結成日と定め、BUMP OF CHICKEN＝バンブは本格的に産声を上げた。

升は後のインタビューで、当時バンドを始めた理由について「自分の存在を知らしめたい」とい

う初期衝動がきっかけだったと話す。その衝動が、30年後の現在まで続く探究心へとつながっていったことは、30年の歩みを振り返るうえで重要な意味を持つ。

2000年3月にリリースしたインディーズ時代の2ndアルバム『THE LIVING DEAD』は、邦ロック好きだけでなく、幅広いリスナーへと届くヒットとなり、筆者にとっても友人から借りた同作がバンブとの初めての出会いだった。当時はインターネット前夜。彼らの情報を得る手段は限られており、ラジオにリクエストを送ったり、何度も曲を聴き直すというシンプルな掘り下げ方が主流だった。そうした愛おしい時間の積み重ねが、彼らの音楽とリスナーの距離を少しずつ縮めていったのだろう。

同年9月にメジャーデビュー。2001年発売の「天体観測」を収録した3rdアル

バム『jupiter』で初のオリコン週間チャート1位を獲得するなど、目を見張る躍進ぶり。まさに升が「日本のロックを変えよう」と掲げた言葉が現実になった瞬間だった。その後もバンドの歩みは止まることはなかった。「天体観測」はドラマ化を通じてさらに多くの人の青春に寄り添い、以降も彼らはさまざまな音楽の変遷をたどる。シンセサイザーなどエレクトロな表現を取り入れた「ray」(2014年)では新たな音楽的境地を開き、



NHK連続テレビ小説『おかえりモネ』の主題歌として書き下ろした「なないろ」(2021年)では、世代を超えた広がりを獲得した。そして30周年を迎えた今。ワイヤレスイヤホンから響くバンブの歌には、初めて聴いたときの衝動が変わらず宿っている。

彼らはいつの時代も過去の成功に留まることなく、新たな表現へと踏み出してきた。2024年発表の「strawberry」はバンブらしい内省的な趣を持ちつつ、アルペジオやクリーントーンを基調にしたギターサウンドによって、繊細かつ現代的な音像を描き、近年を代表する名曲に。また、2025年オンエアのTVアニメ『僕のヒーローアカデミア FINAL SEASON』のエンディングを飾った最新曲「I」では、タイトなリズムとシャープな輪郭を持つサウンドが実にエモーショナルな手

触りに。こうして1曲ずつ紐解いていくと、4人が30年にわたり、表現の可能性を広げ続けてきたことが分かる。

「毎回、ひとつひとつやったことの新しいことをやっているんです。そういう取り組みが楽しくてしょうがなかったんですね」

公式サイトでの30周年インタビューで藤原は、初期の自らを振り返ってこう語っている。未知の表現へ向かう少年のような音楽との向き合い方は、30年という時間を経た現在の楽曲にも確かに息づいている。30年の間に、世界は大きく様変わりした。元号は変わり、CDが大量に売れる時代ではなくなり、アルバムを曲順に楽しむリスナーも少なくなった。音楽を取り巻く環境が大きく変化の中で、BUMP OF CHICKEN自身

も制作や表現の形を更新してきた。それでも、目の前にいる誰かへ音楽を届けるという姿勢は変わらない。その信念こそが30年という時間を形作り、現在のBUMP OF CHICKENへとつながっている。

10月からは【BUMP OF CHICKEN TOUR 2026-2027 Ratio Clavis】へと出発する彼ら。11月21日・22日のあなぶきアリーナ香川、

11月28日・29日の広島グリーンアリーナ公演を含む全国10カ所20公演を駆け抜ける。

小さなライブハウスから大規模な会場まで、彼らが立つ場所は拡大し続けてきた。しかしライブのたびに繰り返されてきた本質は同じだ。4人が音を鳴らし、観客がそれを受け取る。そういったシンプルな循環の純度の高さこそが、BUMP OF CHICKENのライブの核なのだ。ツアータイトル『Ratio Clavis』が意味する“鍵”は、きっと31年目の向こう側にある扉を開くものになる。初めてバンブの曲を聴いた日の衝動、何度も救われた言葉、ライブで分かち合った時間。それら全てを抱えながら、BUMP OF CHICKENはまた新しい一歩を踏み出していく。30年を経た今だからこそより深く響く彼らの音を、改めて受け取りに行きたい。☺